

---

# 短編 「電腦戀愛」

やさいとぶどう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編 「電脳恋愛」

### 【Zマーク】

Z8167F

### 【作者名】

ややことどふじい

### 【あらすじ】

15歳で、夏だった。ひきこもりの少年が「恋愛」というものを見つけだすまでの物語。

(前書き)

連載の方でやつていた「電脳恋愛」というのを、大幅に修正してなんとかかんとか畳み込んだのがこれです。

物語の内容は変更していません。

きれいだなあ · · · · 。

火照るようにさわがしい空氣や、いつまでもつづく蝉の合唱がぼくらの小さな世界に満ちていた、あの日のことだ。

左右に屹立<sup>(きつりつ)</sup>した校舎の隙間から見える、青く、壮大なそらを、おおきな白い雲がきらきらと輝きながらゆっくりと散歩していた。ぼくは君とよりそいながら、ふたり純白のアオの世界をみあげている。ぼくが小さくつぶやくと、それにこたえるように、わたしはここにいるよと教えるように、君は優しく、にぎった手のひらをつくした。風にカーテンがゆれる教室の窓は、どこまでも元気な太陽にてらされてまぶしく反射し、ふたりはむじやきにほほえみながら、目を細める。

全てに絶望しながらも確かに希望と、未来を見上げていた15の夏に・・・ぼくは、君とであった。きっと、ぼくらは出会ったんだ。

やうだらう・・・?

ぼくは、恋をした。

たとえば・・・あのとき。中学を卒業し、特になんの夢も持たず  
に地元の高校に入学した、その年の春のことだった。

高校の入学式。その日は桜が咲き誇るどころか、空はずつしりと  
した暗黒の雲におおわれ、いやでも耳にこびりついてくる不快な雨  
音が、びっしりと新入生が整列した体育館に響いていた。辺りは見  
知らぬ人間で埋め尽くされている。そんな中ぼくは、ひとりの女生  
徒の姿に、思考を奪われたのだ。

しかし・・・恋、などと表現すると、どこかに違和感を感じて  
しまう。そもそも、ぼくは恋といつもの定義がわからなかつた。  
現にあの時のひとめぼれも、子どもが飽きたおもちゃをぽいと投げ  
捨てるように、ひとつもまたずに消え失せた。昔からそうだった  
のだ。確かに一時は心を揺り動かしているのだ。けれどそれはど  
こから来ているものなのか、いまいちよくわからない、ひどくもろ  
いものだつた。

だから、きっとぼくは魂の體からひとに惚れ込んだことなど、生  
涯でただ一度もないに違いない。結局、そんな冷めたような態度の  
心を知つてのことなのか、ぼくは一度もだれから告白といつもの  
をされたことがない。もちろん、自分から愛を打ち明けるなどとい  
つたまるでまんがのような行動をとることも絶対にありえないのだ。

けれど、そんなぼくでも恋をした。確かに、人を愛したのだ。

それは・・・。きっと、他人から見たら、まるでばかげた、恋などと形容すべきではない感情なのだろう。たわいのない、まるで遊びのような想い。しかしそれは、正真正銘ぼくにとってはじめての、だれかを心の底や、表面や、どこかそこから想ひ、「恋」というものだったにちがいないんだ。なぜだか、そう、信じてみたくなった。

ネットのなかのひとりの少女。薄暗く、どこまでもつづくネットの黒い深海のなかで、彼女と出会うべくして出会つた、あのとき。ブログのなかのアイドルへの、切なる片思いのはじまりである。

一週間ほどまえの日のこと、ぼくは飢えていた。女性、といつものに対してもぐるぐると腹をならしていた。それも仕方のないことである。こんなぼくでもお年頃だ。本能的なにかが自分の中心でうごめいているのを感じた。それは、いらつきを伴っているようでもあるし、ひどく、せつなさを感じるもの約でもあった。

その日、仮病で学校を休んでいたぼくは、お腹頃にやつと布団からはじだし、食事をとろうともせずにノートパソコンの電源を入れた。このノートパソコンは小説家の母が以前使っていたおさがりだ。中学生のときにもうつて以来、ひきこもりがちなぼくの相棒となつている。シンプルなフラットフォルムにシルバーのカラーリングだ。そして100キロの衝撃にも耐えられるという、なかなかにすごいやつなのである。

表面をすこし撫で、本体を開き、左下についている電源スイッチをスライドさせると、スイッチ部分が緑色にひかりまるで、スター

ウォーズのR2D2のような声をあげながら起動する。部屋は、力一テンをしめきつてるので毎回、だとうに薄暗く、機械の起動音だけが、もの寂しげに、小さくがりがりと、ひとりの世界に響いた。ぼくは勉強机に座りながら画面の光だけをじっと見つめてパソコンが起き上がるのを待つ。

学校も行かずにひとつでこんなことをしてくると、ああ、ぼくにはたぶん何も無いのだなと静かに、ゆっくりと、やがれかれてしまう。

聞き飽きたメロディーが流れるとともにデスクトップの壁紙が表示され、アイコンが次々と画面に出現し、きれいに整列する。ぼくは迷うことなくさまざまのアイコンの中から田的の一つを見つけ出し、ダブルクリックする。するとインターネットエクスプローラーが起動し、ホームページに設定してあるGOOGLEのウインドウが瞬時に開く。そして・・・。

こつも、じじで困惑つてしまつのだ。よびみなく動いていた指先が一瞬とまり、迷う。

なにをしようか。なにをすべきなのだろう。しかし、そもそも、目的など無い。いつもの作業。ひとり部屋でノートパソコンを起動する。それはひとりの淋しさを紛らわすためのものもあるだろう。身体を動かす意義があるということを証明し、不安をどこかに押しやろうとする行動であるのかもしれない。しかし、結局のところ、「それだけ」なのである。だから、こいつを呼び覚ますとき・・・。ぼくはこつも、からっぽだ。

携帯電話の時報が、午後0時をしらせた・・・。音が、むなしく空気をふるわせる。

ぼくはそして、きづいてしまったようだ。けしてどうしようもないから、いつそ、何も知らないで良かつた、なによりのことを。いつもと、どこかよく似た毎日が、幾日、幾月、そして幾年も、まるで優しく思えるかのように繰り返し、遠い道のりを超えていつしか、ついにぼくにめぐつてきてしまつたんだ。ぼくはめぐりあつてしまつた。

ぼくは、それとしつかりと見つめあつた。ふるえながら、なおもあがくように向き合ひ、必死でみあげた。恐怖し、涙するほどたかく、たかくそびえた、それを見上げた。それでもぼくは……。

でも、やつぱりだめだつた。・・・わかれの時がきたんだ。ぼくは、相棒を捨てた。

一週間前のある日、ぼくはおさがりのノートパソコンをわきにかえたまま、家を飛びだし、町を疾走した。うめき声を漏らしながら、はしつた。通行人の主婦などが不審者を見る目つきでぼくをねめつける。けれどなおもはしつた。いくつかの家角をまがり、住宅地を走り去る。うめき声はしだいに叫び声にかわつた。人にぎやかな商店街を、一直線に駆け抜ける。他人を押しのけつきとばしそれでもはしつた。

想像を絶する、「孤独」という恐怖に打ち勝とうとするかのように、だれかに、必死で助けを請つように、ぼくは、さけび、疾走した。人通りの少ない裏道にはいる。両脇には街路樹が覆いかぶさるようにたち並び陽の光をさえぎっていた。カラスが数羽、ぼくを哀れみ、語りかけるようにひくくこえを響かせて・・・。

突然、前方に自転車があらわれる。猛スピードではしつていたぼ

くは、とつせにそれをよけるために、盛大に「うるさい」と吹き飛ぶように回転しながら木に激突する。自転車はぼくを怒鳴りつけた、とまともせずに、走り去る……。

たおれたまま、顔をあげると、相棒は、そこらへんの地面にころげていた。ひっくりかえったまま、ころげていた。ふたが、まぬけそうにすこしほかんと開いていた。

お前……100キロの衝撃でも耐えられるんだってな……。  
だから、だいじょうぶなんだろう? きっと、ぜんぜん平氣で……。  
きっと……。きっと……ひとりでも……。

なぜなのだろうか。ぼくはなんだかよくわからないけれども、だれもいない薄闇のみちでひとり地面にうつぶせになりながら、泣いていた。相棒は、ぴくりとも動かなかつた。

ぼくが、まだ彼女と出会っていない一週間前のあのひ……。ぼくはおなかが減つて、ぐるぐると腹をならしていた。おさがりの傷だらけのノートパソコンをわきにかかえたまま、よたよたと歩いていた。

本当は、捨てるつもりだった。裏山について、木のしたに穴を掘つて、埋めてしまう気でいたのだ。そうすれば、きっとなれると思つたんだ。ぼくはどこにでもいるような、ごく普通の高校生になりましたかつた。戻りたかったんだ……。けれどなんだか、その気はきれいやつぱりぼくのなかから消えうせてしまった。

しかし、あれだけ走つたせいか、とてもおなかが減つたので、とりあえず腹ごしらえをしようとおもつた。帰り道にコンビニによりみちし、泥や傷のついたぼくらを店員にじろじろ見られながら、

おにぎりを数個とペットボトルの炭酸飲料を買つ。誰もいない家に  
帰り、鍵をかけて自室にたてこもつた。パソコンを勉強机のうえに  
おき、夢中で食事をとする。

実際に言葉にはしないけれど、たぶんぼくはとてもありきたりで、  
まるで当たり前のようにわかりやすいことに気づきそれを得た。け  
れどもそれは、どこまでも切なくなるほど、必死に、誰でもなくこ  
のぼくを支えようとしてくれる。

### ひとりでないため」。

だからぼくは、いけるとおもつた。これからはいけるぞー!としつ  
かりこうが叫んでくれた。でもやつぱり、それはいまいちなぜだ  
かわからない。食事をおえた。息を大きくなさだす。よし・・・ま  
だ腹はぐるぐるとなつているな。

そしてこれから、ぼくは電腦の世界に深く深くめぐり、ついに、  
運命の、出合いのときをむかえることになる。ぼくは、ひきこもり  
になつたんだ・・・。いやりと笑いながら、この世の神に、宣言し  
てみた。

赤を放つていた夕日が沈み、暗闇があとずれた。彼がそれを知る  
ことはない。

彼女と出会い、3日ほどまえのことだ。

たとえば世の中の男子諸君は、恋をするに際して、こんな風に悩んだりするものである。こんなちびでめがねで貧弱なダメ人間が、あこがれのあの子とはたしてつりあうのだろうか？いや・・・むりだ。ぼくなんか・・・生きる価値が無い。・・・まあしかし、これはまるでぼくのことであるが、こんなように考えるやつも、きっと学校のクラスに1人2人いるはずである。ともかく、ぼくは悩んでいた。しかしぼくの悩む対象は、まったくもって情けなくてどうしようもなかつたのだ。

インターネットの世界に没入し、依存し、現実を逃避した結果、ぼくは現実世界の住人ではなくなつていた。肉体のみが電腦世界の入り口に取り残され、魂は広大な、ネットという漆黒の大地を爆走していた。魂は一日に数回だけぬけがらに戻り、そのとき存在する意味があまり見当たらぬ肉の塊は、ぼくになつた。現実形態のぼくの姿は、ちょっと筆舌しがたいので、なにもいわないのでおくけれども、なんとそのゾンビ状態で深夜に、家宅から徒步1・2分ほどのコンビニにふらふらと歩いてゆくもんだから、ぼくは近所の人たちのちよつとしたうわさになつっていた。

しかし、ぼくはそんなことおかまいなしだ。なぜなら、ぼくはひきこもりだ。この小さな空間を永遠に支配する王なのだ！ぼくはだれにも影響をうけない！だれもぼくに危害を加えることは不可能なのだ！

・・・・・

なぜだらけ。いつこいつとを叫んでみると、やつぱつ、さみしくなる。胸のあたりが、なんだかとてもなつかしい想いで、満たされそうに・・・いや、大丈夫や。ぼくはすぐじぼくのあるべき場所、ぼくの本当の故郷にトリップだ。

もやがかつた包み込むような薄暗い部屋が、いくらかのあたたかみを帯びたパソコンが、そして、ぼくを今か今かと輝きながらまつている電腦の世界がいつものようにぼくを、やせじく迎えてくれる。

運命の出合いままであと3日ほどだった。ぼくは今、友達と楽しそうしゃべりをしている。いや、今は確かに友達であるかもしれない。しかし、いつかきっと・・・。

風にゆれる長い黒髪、全てを見す正在するかのような、ヌシとしたきれながのめ、雪だるまを彷彿とさせる、透き通った真白の肌・・・。ぼくはひたすらに彼女を思い描く。そう、彼女こそ、ぼくのあこがれの女<sup>ひと</sup>なのだ。事のはじまりは、唐突だった。

女性に飢えていたぼくは、手当たり次第に掲示板で画像をあさつた。しかしほくの収集する女性たちはかなり偏りがあり、それは少々、問題ともれるべきものだった。なぜならそれらは、小学生から高校生あたりのあられもない少女たちであったのだ。

ロリータ・コノフレックス、つまりはロリコンなのだとこいつとを、自身も痛いほど理解していた。しかし、ぼくは眞実を知っている。ひきこもりやオタクでなくとも、ロリコン男は「うじゅうじゅ」といふことを、自身も、吐きそうになるほど理解しているつもりである。まあしかし、正味、これはただの余談というか・・・言い訳であるけれど・・・。

だが、許してほし。ぼくはそれほど重症のロリコンとこいつわけではないのであるから。これが小学生から中学生まで、はては幼稚

園児から小学生といふ範囲にまで限定されてしまえば、それは神をも認めさせたロリコン野郎といふことになるだらう。さすがにぼくも、そこまでいってしまつてはいるとあつた瞬間に逃げ出すか警察に通報するだらうな。だから軽蔑しないでくれ。確かにロリコンといふ事実は認めるが、根はどこまでもさわやかに、じいじはまるでビーチを照らす、南国の大陽のように晴れわたる好青年なのだよ。おつと少ししあちぢだつたかな？ははは・・・。

などびこつた内容のおしゃべりを、ぼくは彼女と楽しくしている。正直な話、ゆきだるまの彼女とは、わざわざあつたばかりである。出会つた瞬間ひとめぼれしてしまつた彼女に、なんと、出会つた瞬間ぼくがロリコンだといふことがばれてしまつたのだ。しかし、だけど・・・ああたのしいなあ・・・。ぼくはいま、じきじきしている・・・。

・・・その約一時間後のことである。

ロリータ画像掲示板であつた彼女は、なんとネカマだつたらしい。ぼくはその事実に實際、B-29の爆撃並みの衝撃をつけた。ちなみに言つておくけれど、ネカマとは、ネットの中で女性になりきつている男のことである。ぼくに話しかけてくれた最初の一言にて、運命的なものを感じたのに・・・。最後の最後、ついでに彼はこんなことを言つてくれた。

おれもロリコンだぜ。セーラー服の中学生専門のな！

・・・よつぽど警察に電話して署まで連行してもうおつと思つたが、電話で人とはなすのが怖いのでやめておいた。つまりは、ぼくのあこがれた運命の女は、ただのロリコン野郎だつたのだ・・・。

そんなこんなで、ぼくの電腦の住人としての日々は、ゆるやかに過ぎていった。

「の安らげる、なんの障害もない平坦な日々は秋の、木々の葉がひやりとした風に吹かれて、ひらひらと舞いながら地に落ちてゆくように、身を削られ、その身を殺される、もろく、儂いひとときなのだと知らずに。」

きみのからだにしつかりと巻いた、あたたかい闇のすきまから、すこし目を凝らしてみれば、とおくの方には耐え難い終わりの光がまたたいていとも知らず。ぼくは、それでも・・・

ただ、生きた。

ぼくらが出会い、その前夜のことである。

ぼくは、本当にただなんでもなく生きていた。人が成すべきこと、成し遂げたいと誰もが願うこと、とても大切なそれらを何一つぼくは見つけることは出来ずについた。それでも、自分の生活にこんな生き方でいいのか、と疑問をわせたことはおそらく、一度も無かつた。

最近なんだか不思議に思うことがある。ひきこもりになつたばかりの頃は騒がしくぐるぐるとなつていた腹が、だんだん女性を求めなくなつていい気がした。けれどそんなこと、ぼくの生活には何の関係もない、まるで些細なことだ。それに、ぼくもだんだんと大人になってきたじゃないか、と、ぼくは・・ひとり・・笑つた。

ぼくの、ぼくだけの、ひとと関わるよろこびを知らずに、いつでも理不尽に傷ついてきたこころや、ただひとつだけの命を、いまで必死に支えてきた、ちっぽけながらだは、いつしか切なげにほほ笑みながら・・・限界を迎えるとしている。それでも笑う彼らは、ぼくは、いまなに想い、生きているのだろうか。

今夜も、ぼくはのんきに、入り組んだインターネットをどんどん制圧してゆく。この、まるで異次元や、夢のなかにいられたかのような一週間で身に付けたさまざまな技術を最大限にいかし、ぼくはずしりと重い深海を高速で移動する。

今ではすっかり常連になつたさまざまなサイトを訪れ、そこに心地よさげに居座る住人たちに手を振る。だけど、彼らはけして、ぼくに手を振りかえすことはない。ぼくはそんな電腦の住人たちに、にを思つでもなく、うつろな瞳で再び前を向き、ゆらゆらと進みはじめる。前から、だれかがやつてきた。けれど、ぼくがその手を振り返すことはなかった。

いまのは誰だろう。なんだかとても見覚えがあるよつだつたけれど・・・暗い漆黒の世界で田をこらす。すると・・・田の前の暗黒に、恐ろしい顔をしたゾンビがうつっていた。

ぼくの心臓はまるまる2センチは飛び上がつたとおもうのだが、なぜだか、のどからはかされた声しか漏れてこなかつた。

心臓がもとの位置にすとんと落下して、数秒たつてからぼくはパソコンの電源が落ちていたことにきづく。色を失った画面がうつしていたのは、このぼくだ。少しばかりショックギングだが、やれやれ自分にこれほど驚くとは・・・と笑おうとしたとき、とつぜん暗黒をみつめていたはずの田の前が、まっしろになる。その刹那、ぼく

の体がぐらりと揺りぐ。ぼくは知った。

「これが、終わりの光なのか。ついにぼくは辿りついてしまったんだ。めぐり合ってしまった……。

なんの音もしなくなつた。王国のまんなかで、ひきこもりの王様が静かに横たわっている。彼は、今度は走り出すことをしなかつた。ごみや衣服の散乱した薄暗い部屋で、ひかりを放つているものは、なにもない。

ぼくは、ぴくとも動かなかつた。

遠くで、朝日が山の向こう側から、またきはじめていた。

少年と少女が出会うずっとまえ、遠いむかしのこと……。

ぼくは東京でうまれた。草花の芽生えが始まり、生命の息吹がありを潤す、春先の頃だった。下町のちいさな病院で、ぼくはおおきな産声をあげた。ほかのどの子よりもおおきな、生命の喜びを世界に知らせるかのような声だった。母親のからだが小さかつたため、母は帝王切開でおなかをひらかれぼくはシャバへと、意気揚々と躍り出た。そのため、生まれたてだというのに、元気すぎるほどの男の子だった。いつまでもぶんぶんと腕を振り回していたといつ。

赤ん坊は、母親の子宮から外の世界へと旅立つときに、すさまじい苦しみを味わうのだそうだ。人生のいちばんはじめに、もしかしたらいちばんおおきいかかもしれない壮絶な試練を乗り越えて、ひとは生まれる。それでやっと一人前の、にんげんになれる。

でも、ぼくはそれを知らない。

この世界の苦しみをなにひとつ知らない、まんまるで、ふにゃふにゃのじれりをもつた赤ん坊が、ここにちこちく生き始めた。

まだピアノのしたを走れるくらい、ちいさかつたあのとき。

ものじれりついた頃から、父親はもうになかった。だいぶ最近になるまで、それを不思議におもうことはなぜだか無かつた。世界中の子どもたちが、ははおやと、ちいおやがいることをまるで当たり前のようと思つてゐると同じように、ぼくは何も感じることなく、母さんのほそい2本の「う」がぼくを必死に支え続けるのをぼんやり見つめていた。

#### 小学生時代。

小学生のことは、楽しかつた。だれかとつまく話せなくて仲間はぐれにされたこともあつたけれど、それでもまだ、ぼくは世界の本当の恐怖に気づいてはいなかつた。

#### 学ランを窮屈に着込んでいる、中学のじる。

部活動にはいつていなかつたぼくは静寂が悲しく耳にひびく一軒家で、遅くに帰つてくる母をひとり待つた。この家は祖父の所有物だつた。しだいに、ひとと話すことのあまり無いぼくは、その術を失くしていった。孤独の苦しさに耐えるため、じじりを内側に押し潰した。

いつしかぼくは、この世界では生きてゆけないのだとじつった。

そして、15回目の春、高校生。

あのとおり・・・。一週間前のあのひ、ぼくは一瞬の恐怖におびえた。そこから珍めに逃げ出し、ひとひととの間にあつた大切な、いくつもの光を、すべて捨てた。ははが残していくお金もつきかけていた。なのに、ぼくはひきこもりになつた。

・・・いつしか母は、いなくなつていたんだ。長い年月を生き、世界の数え切れないほどの痛みを知つていたぼくはとても自然にそれを受け入れた。ぼくの、この信じたくないなるほどのひろい世界でたつたひとりだけの家族、母さんはぼくを捨てたんだ。

だから、ぼくはこれでいいと思つた。

ぼくがもしこの世界の、なにもかもを放り捨ててただひとり宇宙のはじっこでちつぽけに朽ち果ても、悲しむひとはいない。ぼくを想い、ここひでぽりぽりと涙を落してくれるものは、どこにもない。どんなに泣き叫びながら探したつてない。無いんだ・・・。

「ぼくは、いつだつてひとりぼっちだった。

ええと・・・。

これは、きみのこと。ぼくをいろいろの底から救おうとしてくれた、愛すべき、信ずべきひと。ぼくが守りたいと、願う彼女。けれどぼくはきみを知らない。きみは・・・。きみは一体、だれなんだ？

きみはこのとき、まだこの世界に存在していなかつた。けれど遠い未来、ぼくがきみと出会つとき、きみは確かにこういうだらう。きみは、ぼくとおなじくらい長い年月を、生きてきた。きみはぼくと同じようなひと。同じ場所にいる。だから、きみとぼくはいつも同じよ。おんなじなんだよ。

とてもやせしこ姫で・・・。

それから以前のことば、ぼくはなにも知らない。

そしてあの日。久しぶりのそらはひたすらに青かつた。暗いネットの深海から打ち上げられたぼくは、横たわりながら流れる雲と、青空をみあげていた。ぼくときみがであった、この日のことです。

意識を取り戻したぼくが存在していた場所は白く、清浄な世界だつた。開け放った窓からさらさらとこりがつてくる風が、心地いい。空気が輝くみどりを含んでいるのがわかる。そのちいさな四角から、巨大な雲と空がのつそりと、すぐそこに見えた。そのおおきさに恐怖して、のみこまれないよつとぼくはふわりと目を開じる。すると光が閉ざされた。

おなじ暗闇がえんえんと満ちていた、あの部屋でのことが、ぼくの脳内で静寂の音をともなつて再生される・・・。

昨夜、極度のひきこもり生活の末にぼくのからだは限界をむかえた。ぼくは凄まじいだるさに襲われていた。頭蓋のなかは**轟轟**とした**轟**<sup>もや</sup>につつまれているようで、なにも言葉を生もうとしない。これからだは絶望的な何かにつらつらと支配されているのではないかといふ気がして、ぼくはそれに必死で抵抗してみる。すると突然、目の前がぐにやりと歪むのがみえた。そしてぼくは意識をうしないそのままに倒れこむ・・・。

それからぼくは、電気代の集金にきた男に発見され、ここに運ばれたそうだ。玄関のドアは開いていて、部屋の扉の鍵穴からぼくの姿がうかがえたらしい。

ぼくはいま、町の病院にいる。

さみとぼくが出会ひやさずの、今日。

“じいが偉そうで、患者を田下にみているような医者がこう。もうすこし発見が遅れていれば危なかつたのだよ。さみはいつたい何をしていたら

こんな状態になるんだね。まったくもつてやる氣の無い声で、何の意味もない説教を垂れ流す。

ぼくはとくに聞いていなかつた。せかせかと、音声を耳の穴からもう片方の耳穴へと通りぬけながら、おもつた。こういう奴がうじゅうじゅういるからこの世界がいやになるんだな・・・しかし、ぼくはもつこのだだつぴろい世の中に着の身着のまま放り込まれてしまつた。王国は崩壊し、信頼する相棒とも別れてしまったのだ。やつはまだあの部屋にぽつんと残つてゐるのだろうか。ちいさな希望と、絶望の残骸に埋もれながら・・・。

夜になつた。

ひんやりとした空気があたりを静かに包み込み、落ちついた紺色の空には、遠い宇宙の彼方に回りながら巨大に浮かぶ、ぴかぴかした惑星や、衛星たちが今夜もぼくらにその美しく、幻想的な姿をお披露している。

ぼくは病院のベッドの中で夜空を見つめていた。医者の言葉を断片的に思い出してみるとじゅうやら、ぼくは入院することになつたようだつた。なんだかじつとしていることに苛つきを感じた。なんだらう。なんだか妙な胸騒ぎを感じる。ダメだ。ここに居てはダメだ。わあわあと本能が騒ぎ立てる。すると、ぼくはすこしおかしなことを思いついた。それは、いくぶん狂っていたとも思える。

ぼくはベッドの中からはい出し、病人たちの寝静まつた病院の閑散とした廊下を歩く。音を立てなによう、ちこちくゆつくりと移動

した。夜の病院といつのは、ときに恐怖すら感じさせた。息づかいすらも、漆黒の回廊のむこうまで響いていた。やつぱり、やめようかと思った。と理性さんが心のなかでいつてみるとまた、本能くんのブーリングである。

廊下のまがりかどでいつたんとなり、視覚と聴覚の入力ポートの感度を最大にする。病院にもやっぱり見回りとかあるもんなのだろうか？けれどもぼくのセンサーはなにも拾わなかつたようなので、右折して進む。そして、表の道路に面した窓を見つけた。窓の前に立つと鍵をあけ、ぼくは枠に腕をかけてなんとか乗り越える。そとの地面にどたりと着地したとたん、猛然と走り出す。

ぼくは、病院を脱走してみた。

きみと出会う、月夜の晩。

ぼくは途方にくれていた。いまさらになつて気づいてしまつたのだが、ぼくはあの病院が、町のいつたいどの位置にあつたのかを知らない。

いや、もしかすると隣町の病院だつたりするんじゃないのだろうか。気を失つたまま運ばれたのだから、わかるわけない。無我夢中で駆けた為にここがどこなのかもわからなくなつっていた。病院に戻ることすら出来ない。

ひいんと張り詰めた冷たさがぼくを冷静にさせると、からだの奥の方から轟々<sup>いよいよ</sup>と音を響かせながら、恐怖の烈火がせりあがつてきた。こうなつてしまえば、もうあまり時間は残されていなかつた。恐怖がぼくをじりじり焦がし始めているのがわかる。このまま焼き尽くされてしまえば、ぼくは恐怖に耐えられず、パニックに陥つてしまふはずだった。

樂観的な状況ではなかつた。

日本トップレベル、つまり世界トップレベルのひとりもり生活によつて、ぼくの運動能力や、体力などといったものは極限まで削減され、そういうえばさつきからなんだかふらふらするし、少し気を抜いたら嘔吐して黒い地面にうずくまつてしまいそなのだ。入院患者がタイム更新日指して全力疾走するべきではないといつことが判明した。しかし、そんのは許されなかつた。こんな状態のまま野外で一晩明かしたら、ぼくは死んでしまう・・・。全身からどんどん流れ落ちる脂汗が炎を激しくさせるなか、ぼくは意識をはつきりとさせていなかつたが、それだけは確かに理解できた。ぼやけた景色をみまわしてみたが、光が灯つている建物はあらずもう深夜なのでしつかり戸締りがしてあるようだつた。息が上がつてゐる。きもち悪い。暗黒の景色が数秒に一度、くらりとぶれる。なにかにすがるように、闇の向ひの側まで田線を馳せながらよろづぎりと進んだ。

つらかった。泣き出しそうだつた。だけど、ぼくを誰も助けることは出来ない。まわりには人つ子一人居なかつた。黄金色の月が、いつもと変わらずゆつたりとぼくの頭上に浮かんでいた。彼はなぜ、いつまでもぼくを助けることをしないのだ? どうか、とぼくはあはは、とよれた笑い声をたてる。冥界の死の使いに、金色に輝きながらぼくがここにいると知らせているのか・・・。ちくしょうめ・・・。くやしい・・・。ぼくは死ぬのか? だれも助けてくれない。ぼくは・・・。

ぼくは、いつかのことを思い出す。

”ぼくはひとりなんだ”

それはひとつひらの、ちこさな、忘れかけられていた言の葉だつた。すると、どこからか優しく吹いた電腦の風が、ふわりとぼくを取り

巻く。

強い意志をもつた風が、葉をのせて、ひらひらと舞い踊りながらぼくのちっぽけなからだの全てを、あたたかい黒で包み込みながらひゅるひゅるりと幾度も駆け、巡った。

それらは、遠くとおい遙か彼方からやつてきた、ぼくことって大切なものたちだった。

ぼくは思い出した。あの日々を。そつだ、ぼくはいつもひとりだったじゃないか。今回だって、いつもと同じだ。なにも変わらない。ぼくの漆黒の力が、赤の炎を飲みこみながら恐怖を消し飛ばした。戦える・・・。ぼくのじいじが爆発するようにふくらんで、みなぎった。

ぼくは孤独とたかう戦士だ。孤独の戦士。電腦の、戦士だ。

・・・ねやすは、没落の王国。ちこちな世界のなかの王さまは、いまむくつと立ち上がった。少年の、最後の戦いがはじまる。

少年の背後で円がつなづくよつよ、きらりと輝いた。

ぼくは迷ついた。命のようなものを賭してめざした目的の地こそ、ぼくだけのちこちな世界

へ。

魔城は月光を背に受け、光のないからだをさらに黒々と染めながらそびえていた。その孤独の色をみつめると強烈な安堵感が湧き上がった。

するとここりが形をなくし、ふわりとくずれて全身に溶け渡る。とけだしたこころは激しく渦巻く暗黒色だった。ぼくの眼光は赤く、からだからはじす黒い紫の蒸気が噴出している。ぼくの一呼吸ずつが闇を搖るがし、亀裂をいれる。

きっと誰もがぼくを責めるだろう。ぼくに怯え、蔑み軽蔑のまなざしをこつそりと突き刺すのだ。でも大丈夫だ。ぼくはやつと気づくことが出来た。もう、なにも捨てたりしない。

他人がどうとかじやないんだ。自分のこころに強い芯を一本突き立てておけばいい。ときどき重くて支えきれなくなってしまいそうになるかもしれない。懸命に一つの柱を支え続ける自分を孤独と感じ、涙を落としそうになるときもあるんだろう。

目を閉じてみる。

たぶん自分は、いろんな覚悟がまだ足りなかつたんだ。孤独を演じ、悲劇の主人公になりきり続けた。世界の全てを憎み敵にした。その強大さに恐怖し、絶望の涙を幾度そのうつろな目に宿したことだろう。あのとき自分を好きになつてくれない世界なんて死んでしまえと絶叫した声は、そこらじゅうに散らばつながら激しくぼくを傷つけた。

違うよ、世界やぼくの周りのいろんな者たちは初めからぼくに興味なんて無い。誰だつて自分で精一杯だつてのに自分を強くみせようとしたりしてるんだ。世界がぼくを好きになるんじやなくて、ぼくかぼくを好きになること、なんだかそれがとつても大切なことだつてわかつたんだ。

できるかなあ。このちつぽけで弱いこのぼく。

にかを好きになることなんて出来るんだろうか。そんな、この宇宙よりも果てしなく感じる、形のない不安げな何かをこんなぼくが

見つけられるのかな。だけじゃ、なぜだか今なら、信じたんだ。  
きっと、できるんだ。だってぼくが世界で一番最初に愛するべきな

のは、このぼくなんだ。

さみしげな涙を浮かべたちつぽけなこのぼくなら、しっかりと抱き  
しめて愛してあげられるだらう？

部屋へと入った。

表の通りには再び静寂がもどり、空氣も元の場所におさまった。  
いつのまにか世界は朝になつていて、そしていつしか季節も移り変  
わり、ぼくのただ一度だけの今年の春も、いっぱいの思い出を人々  
に残して、騒がしい夏空の影に去つていった。朝の空氣は、誰の思  
念や苦しみにも汚されていない清浄な透明で、生けるものの肺や心  
を優しく満たす。太陽の光とともに風が通りすぎると、香ばしい、夏  
の匂いだ。それは人々の痩せた心に、なんだかよくわからないけれ  
どおもしろいきり笑いたくなるような高鳴りを『える。

闇が、ぼくをしゆるじとすばやく包んだ。ぼくの生きるべき場所  
がそこにあつた。強く、そう感じた。ぼくの小さな世界は、今でも  
あの時とまだつた。

机に置き残されていたノートパソコンを撫ぜながら、ひきこもり  
の日々を思い出す。

おわり

僕の相棒のデスクトップには、左右に屹立した校舎の隙間から見える青く壮大な空があった。ただそれだけの、ある少年の恋愛物語でした。しかしそれはここから始まり、これからも続していく。ああ、腹が鳴っているや。・・・



(後書き)

僕が「小説を書く」ということがどんなものか  
さっぱり解らないなかで、気の向くままに書いて  
いった作品です。というか作品なんて呼べるものなのかな果たして自  
信はないけれど僕はこのお話が嫌いではないので、読んでくれてあ  
りがとう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8167f/>

---

短編 「電腦恋愛」

2010年10月8日15時05分発行